

「協働的な学び」の充実により、児童が主体的に学ぶ算数科教育
～有効的なタブレットの活用を通して～

大城小学校 奥村 美沙子

1 はじめに

令和3年度1月26日の中央教育審議会答申によると、『これからの学校においては、子供が「個別最適な学び」を進められるよう、(中略)これまで以上に子供の成長やつまずき、悩みなどの理解に努め、個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援することや、子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくことが求められる。』、『「個別最適な学び」が(中略)子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要である。』と述べている。

子どもたちが、ICT、とりわけタブレット端末(以下、タブレット)を日常的に活用することで、自分のペースを大切にしながら、学習の見通しを立てたり、新たな学習方法を身につけたりすることが期待される。これまで使用してきた電子黒板や実物投影機は、主に教師が活用する部分が多かったが、タブレットは児童一人一人が操作する。授業で活用できるようになるまでには、時間と経験が必要であるが、教科書やノート、筆記用具と同じようなツール、あるいはそれ以上のものになるべきである。タブレットによって生まれた個の学びを、タブレットで共有することで「協働的な学び」に生かし、さらに個の学びに還元することで、深い学びが生まれる。そうすることで、子どもたちが「もっと友達の考えを聴いてみたい。」「もっと新しい考え方を知りたい。」と、主体的に学ぶことにつながれると考えるからである。

そのため、タブレットの使い方や学習ソフト「ロイロノート」の活用方法を指導することから始まり、タブレットを使用する際のルールを明確にすることなどを経て、授業で効果的に活用していくことが、児童一人一人が主体的に学ぶことにつながると考え、本研究に取り組むことにした。

2 研究の方法

(1) 研究の仮説と手立て

ア 仮説

児童が日常的にタブレット端末を活用して学習し、それを友達と共有することで、自らの考えをさらに深め、より主体的に学ぶ姿勢を身につけることができるだろう。

イ 手立て

(ア) 子どもたちが夢中になるような魅力的な課題を設定する。

深い学びが生まれる授業では、魅力的な課題がすべての始まりであり、意欲を高めるための第一歩である。考え方が一つではないものや、難易度が少し高く一人では解くことが困難なものなどを提示することで、児童の「なぜだろう。」「解いてみたい。」「友達の考えを聴きたい、話したい。」という気持ちを高めることができるだろう。

(イ) 思考を効率的に共有する手段として、タブレットを活用する。

課題に出会い、考える過程において、自分の考えを図、式、言葉などを使って表現する。そうすることで、未熟な考えが整理され、明確になることが期待できる。タブレットは紙に比べて、個々の考えを共有するのに要する時間が格段に短くなる。例えば、スクリーンに投影することで、個人の思考が一斉の場でも容易に共有できる。4人グループにおいても、互いの考えを共有することで友達の考えに刺激され、自分の考えと比較検討することで、さらに自分の考えが深まることが期待できる。

近年、コロナ禍で児童の関わり合いには大きな制限が生まれている。考えを共有し、学びを深めるために、実際の距離が離れていても共有できるタブレットが必要だと考える。

(2) 検証方法

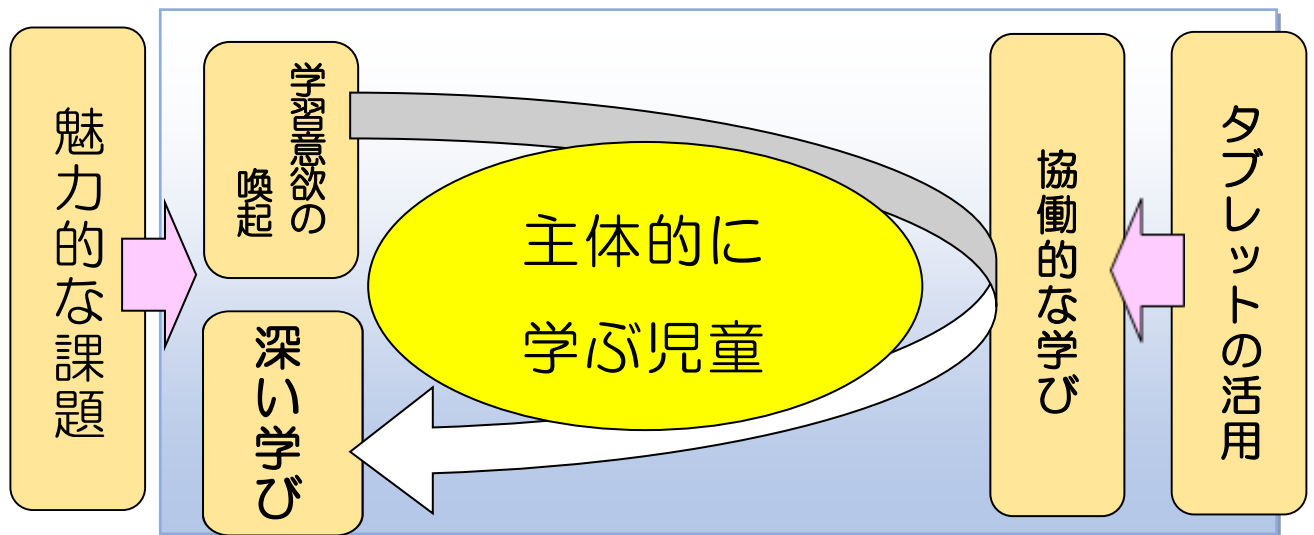
ア アンケート調査の分析

実践後に、タブレットを活用した算数の授業に関してアンケートをとり検証する。

イ ノートの記述内容の分析

タブレットを活用した実践を続けたことで、児童のノートの記述に変容が見られたか検証する。

3 研究構想図



4 研究の実際と考察

(1) 研究の実際

研究の仮説を検証するために、2年「かけ算(2)」以降の全単元、5年「整数と小数」から「小数のわり算」で実践を続けた。以下の実践を中心に検証を進めていく。

学年	単元名	タブレットを活用し、学びを深める場面
2 年	かけ算(2) 11月(18時間)	チョコレート数を求めるために、かけ算とたし算・ひき算を組み合わせ、どんな工夫をするか。 (実践1)
	三角形と四角形 12月(13時間)	身の回りには、どんな三角形や四角形があるか。 (実践2)
	九九のきまり 1月(10時間)	九九の範囲を超えたリンゴ数を求めるために、どんな工夫をするか。
	100cmをこえる長さ 1月(10時間)	つくえを2つつなげた長さはどれだけか。
	10000までの数 2月(8時間)	3200は100をいくつ集めた数か。
	はこの形 3月(7時間)	はこには、面、辺、頂点がいくつあるか。 切り取った面と面をつないで、直方体や立方体を作ることができるか。
	分数 3月(7時間)	12や18の2分の1、3分の1はいくつか。
5 年	整数と小数 4月(5時間)	小数を10倍、100倍した数はいくつか。 各位の数字と小数点の位置がどう移るか。
	体積 4月(9時間)	1cm ³ の立方体が、縦、横、上に何個並ぶか。 複合図形の体積を求めるために、どんな工夫をするか。 (実践3)
	比例 5月(3時間)	レンガの数が2倍、3倍になると、全体の高さはどう変わっていくか。 (実践4)
	小数のかけ算 5月(12時間)	整数×小数の計算における被乗数と積の大小関係はどうなるか。 小数×小数を計算するには、どうしたらよいか。
	小数のわり算 6月(16時間)	整数÷小数の計算における被乗数と積の大小関係はどうなるか。 小数÷小数を計算するには、どうしたらよいか。

ア 授業実践1 2年生 単元「かけ算(2)」

(ア) 課題とねらい

本時は、「箱の中のチョコレートの数を計算でもとめよう。」(資料1 1参照)と課題を定めた。これまで、子どもたちは30時間以上かけ算の学習をしている。本時の課題はかけ算だけでは求めることができない。2つに分けて考えたり、欠けた部分を補ったりと多様な考え方ができる。縦で分ける「 $6 \times 2 + 3 \times 3$ 」、横で分ける「 $3 \times 5 + 2 \times 2$ 」、全体から引く「 $5 \times 5 - 2 \times 3$ 」など、子どもたちの柔軟な思考を生かしていきたい。

また、子どもたちがじっくり課題に向き合う時間をできるだけ多く確保するために、タブレットに思考過程を書かせることとする。低学年の子どもたちにとって、消しゴムで消す作業は簡単ではない。もし紙を用いれば、プリントに何度も書いたり消したりすることが予想される。消すために多くの時間を要したり、消しているうちに、印刷が薄れたり紙が破れたりして、児童が意欲を失ってしまう可能性もある。タブレットであれば、ボタンでひとつ前の操作に戻ることができるため、消すことを恐れずに書きこむことができる。目的外のことに時間をとられることなく、多くの課題に向き合う時間を確保するにタブレットは有効だと考えた。

(イ) 実践の成果

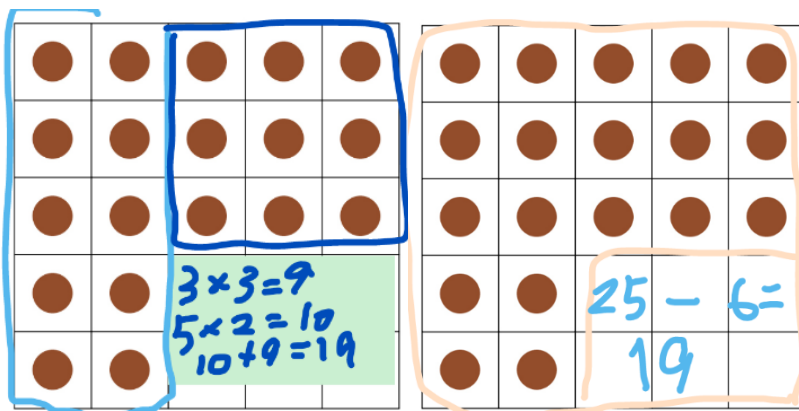
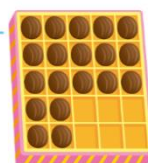
課題を配布すると、子どもたちは予想通り「この問題は、かけ算しか使っちゃいけないの?」と戸惑っていた。「今まで勉強したことを使って、答えを出そう。」と声をかけると、さまざまな方法で解き始めた。

「かけ算を使うの?」と戸惑う子に、「こうやって分ければ同じ数ずつのまとまりになるよ。」とタブレットにかいて見せる子がいた。紙であれば、少し躊躇したかもしれない行動が見られた。

中には、同じ数のまとまりごとにペンの色を変える工夫を始めた児童が出てきた。教師が教えなくても、「そうした方が分かりやすい。」と子どもたち

1

はこの中にチョコレートは
何こありますか。



資料1 チョコレートの数を工夫して求めた例

から声が上がり、他の児童も真似するようになった。2年生の児童が、「どう表現したら、自分や仲間にとってわかりやすいものになるか。」を考えてまとめることができた。紙と鉛筆だけではできないことが、タブレットで可能になった実践の一つだと思う。

考えを共有したことで、子どもたちは自分だけでは思いつかなかった複数の解法を理解することができた。「こんな考えもあるんだ。」「次の問題はこの方法で解いてみたい。」という声を聞くことができ、子どもたちの新たな気づきや次の学習への意欲につながったと感じた。

(ウ) 今後の課題

この実践の中で、タブレット操作の能力差が学習に大きく影響すると感じた。タブレットが全員に配布されて1カ月あまり。恐れずどんどん新しい機能を試す子もいれば、ペンの色を変えるだけで精一杯の子もいた。多くの解法を導くという本来のねらいからずれてしまいかねない子もいた。タブレットの操作に時間を取られてしまっただけでは意味がない。こまめにタブレットを利用して操作に時間がかかりすぎないように、指導の工夫を考えていきたい。

イ 授業実践2 2年生 単元「三角形と四角形」

(ア) 課題とねらい

「学校の中にある三角形や四角形をたくさん見つけよう。」と課題を定めた。教科書で三角形と四角形の定義を学習するだけにとどまらず、日常生活の中から自分で三角形や四角形を見つけることは、多面的なものの見方を育む活動につながると考えた。

今までは、グループに一台デジタルカメラを配布して写真を撮らせたり、見つけた形と場所、物の名前をノートに書かせたりしていたが、一人一台のタブレットがあれば、グループの子と違う対象に興味をもっても、自分でその場所に行くことができるし、納得いくまで何度でも写真を撮り直すことができる。教室に戻って来た後、クラスの友達全員が見つけた三角形や四角形を自分のタブレットで見ることができる。保存して、本時以降の学習にも役立てることができる。子どもたちに新たな気づきが生まれるよう、タブレットを活用した。

(イ) 実践の成果

活動をする中で、「四角形に比べて、三角形は身の回りに少ないね。」と気づいた児童がいた。別の児童が「学校の中ではないけど、車で出かけた



資料2 児童が見つけた三角形と四角形の例

時に見たことがあるよ。」と、インターネットで調べた橋の写真をみんなに送信した。別の児童からも、「他の橋も三角形が並んでできているね。」

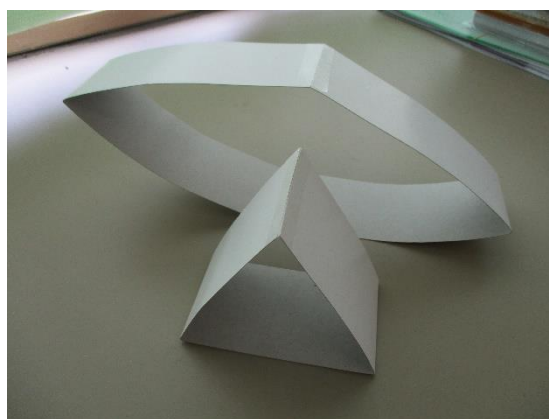
「どうして、どの橋も四角形じゃなくて、三角形なんだろう。」という疑問が生まれた。



ペアでの話し合いを取り入れると、「図書室の本の看板

や、カラーコーンも三角形だった。」「どっちもボタンってならないね。(倒れないね。)」というペアがあり、これを全体で共有した。すると、「三角形は、じょうぶなんじゃない。」「でも、四角形の方が辺が多いよ。」と話し合いが進み、後日画用紙で三角形と四角形を立体で作ってみることになった。

資料3 児童がインターネットで調べた三角形



すると「四角形は、意外と立たない。」「三角形は、上から押してみても簡単に

はつぶれないね。」という声があり、テントや傘、校旗を立てるスタンドなどの、倒れにくいものやじょうぶであってほしいものが三角形の形状をしていると発見するまでになった。

資料4 児童が作った三角形と四角形

本時は、学習を進めていく中で子どもたちから新たな課題が生まれ、それを追究していく姿が見られた。タブレットを使って調べた橋の画像から、平面の学習を飛び出し、「三角形の構造は四角形よりも強い。」ということに発展した学習となった。

(ウ) 今後の課題

本時のように、何か画像を調べさせる際、それにかかる時間をある程度限定しなければならないことである。特に低学年の場合、インターネットで検索した経験が少ない。そういう時に、検索方法を算数の授業の中で伝えるのは時間的に難しい。

「また別の時間にやるから、今はみんなで〇〇君の画像を見て考えてみようか。」と決めて先へ進まなければ、授業として成り立たないため、普段からこのようなことを想定し、自分が調べたものでないとしても納得して授業に取り組むよう指導する必要がある。

ウ 授業実践3 5年生 単元「体積」

(ア) 課題とねらい

9時間完了の2時間目と3時間目である。1時間目に、児童は 1 cm^3 の模型を使って、さまざまな大きさの直方体や立方体を作った。「 24 cm^3 の立体を作ろう。」では、「縦2個分、横4個分、高さ3個分」「縦6個分、横2個分、高さ2個分」などの直方体、「 8 cm^3 の立体を作ろう。」では、「縦4個分、横2個分、高さ1個分」などの直方体や、「縦、横、高さすべて2個分」の立方体を作った。写真で記録を取りながら、「同じ体積の立体でも、形は全然違う。」とふり返りを書く児童が多く見られた。

その上で2時間目の課題は、「好きな直方体や立方体を描いて、体積を求めよう。」とした。与えられた立体ではなく、自分で立体の大きさや形を選択し体積を考えさせることで、1時間目の気づきを生かせるのではないかと考えた。例えば 24 cm^3 の立体でも、形によっては式が「 $2 \times 4 \times 3$ 」になったり、「 $6 \times 2 \times 2$ 」になったりする。「全然違う形だし式も違うのに、わたしとあの子の体積が同じなのはなぜか。」と疑問に思う児童も出てくるだろう。共通の立体を提示すれば、このことに気がつかないかもしれない。

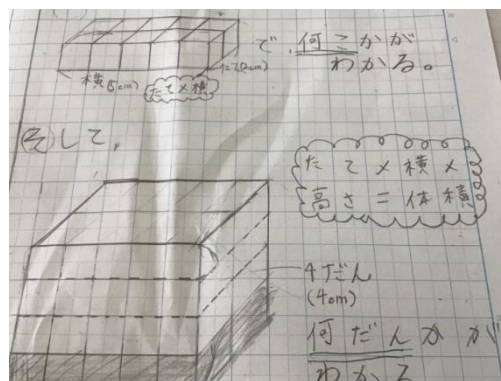
自分で立体を選択させることと、その体積を求める解法をタブレットで共有することで、さまざまな立体の体積の求め方に触れることができる。そうすることで、「覚える」ではない体積の公式を定着させたい。

3時間目の課題は、複合図形の資料をタブレットで配布し、「できるだけ多くの方法で体積を求めよう。」と課題を提示した。今まで何度も「複数の解法で導く」という経験をしてきた5年生にとって、「だれも考えないような方法で答えを出したい。」という気持ちをもつ子は多いだろう。2年生と違い、式が多い上に筆算も必要になるので、児童の実態に応じてノートに式を書かせる選択もしていく。

(イ) 実践の成果

ほとんどの児童が、面積の学習を利用し、体積の公式を「 1 cm^3 が(1段で)いくつ分の何段分」と導いた。

右の児童は「 $2 \times 5 \times 4$ 」の直方体を描いたが、別の児童は「 $2 \times 10 \times 2$ 」の直方体を描いた。どちらも同じ 40 cm^3 の立体だが、形が全然違うことに本人たちが気がついた。「わたしは 2×5 の4段分だけど、あの子は 2×10 の2段分。ビルの体積が同じでも、

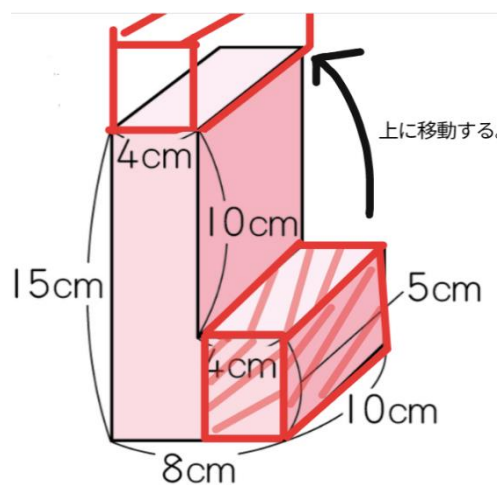


資料5 体積の公式を導いた例

3つの長さが違えば、きっと見た目が全然違うビルになるよね。」とペアで話し合っていた。

児童が体積の公式を導いた上で、3時間目に複合図形の体積を求めた。縦に分ける、横に分ける、全体から引くの3つの方法が予想されたが、一人だけ右のように縦で分けた後に小さい直方体を大きい直方体の上に重ねて求めた児童がいた。

この児童 R は、ノートに自分の考えを表したり、ふり返りを書いたりすることが好きで一生懸命に取り組む一方、全体での話し合いになると、「こわくて、緊張してしまう。発表できない。」と悩むくらい発言することができない。

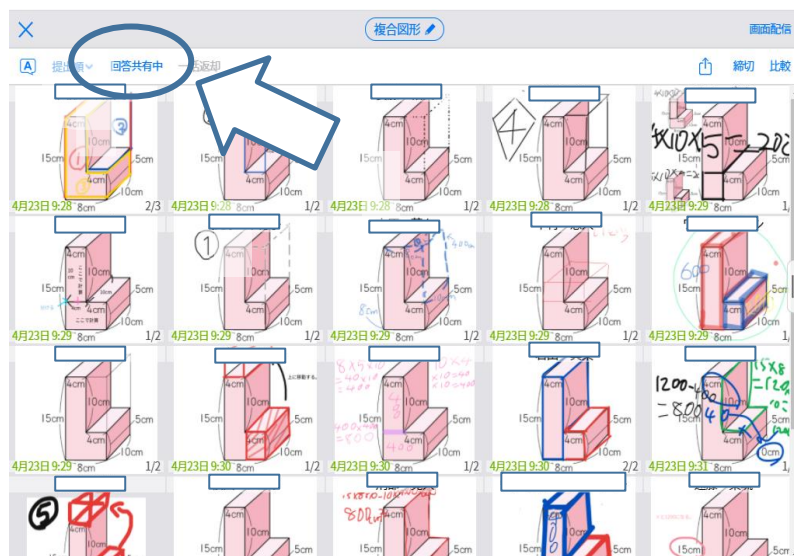


資料6 児童Rが工夫して求めた図

ロイロノートの「回答を共有」で、児童は自由に友達ノートを見ることができる。本時もこの考えを発見した別の児童が、「Rさんの考え、すごい！なるほど。」と声を上げた。みんなが注目し、「よく気がついたね。」と感心される中、はずかしそうな、嬉しそうな顔をする児童 R を見て、「自分から発表はできなくても、まずはタブレットがきっかけとなり、自信をつけるきっかけになってほしい。」と感じた。

そしてそれ以来、児童 R は自分のためだけでなく、仲間にとってもわかりやすいノートを意識的に書いている。

機能として役立つタブレットの、また別の面を見つけた気がした。話すことが苦手な児童にとって、タブレットは強い味方なのかもしれない。児童 R が、今後自分の口で話せるようになるまで、タブレットにはクラスの仲間と児童 R をつなぐ役割であってほしい。



資料7 「回答を共有」で友達のことを自由に見られる

うになるまで、タブレットにはクラスの仲間と児童 R をつなぐ役割であってほしい。

(ウ) 今後の課題

これまでに児童は、タブレットを使って考えを共有することで、自分の考えが友達に認められたり、友達の考えから新たな発見をしたりする経験を重ねてきた。困ったときには、共有した友達の考えを真似することから始まり、答えを導いてきたように思う。

しかし、それらによって個々の学びがどこまで深まっているのか、教師はもっと注意しなければならない。もしタブレットを与えたことで、児童の学びが深まっているつもりになっているのであれば、それはとても危険なことだと思う。一人一人が、どこの場面つまずき、どんな目的で友達の考えを参考にしているのか注意して観察する必要がある。時には、共有した友達の考えのどんなところから、どんなことがわかったかなどを聴きながら、個別の支援をしていくことが求められると考える。

エ 授業実践4 5年生 単元「比例」

(ア) 課題とねらい

本時は、「レンガと植木鉢を積んだ数と全体の高さを調べよう。」と課題を設定した。レンガは単純な「 $y = 3x$ 」だが、植木鉢は「 $y = 3x + 9$ 」である。二つを比較することでその違いに気づかせ、一次関数の立式をしたことがない子どもたちが、その違いをどう表現するか考えさせたい。

そのために、レンガと植木鉢の実物を用意し、植木鉢を重ねる様子や、淵の部分だけが「高さ」として増えていくのを実感させ、思考のヒントにしたい。加えて、植木鉢を重ねていく様子を写真で撮って配布することで、具体物で操作したことをタブレットでも同様に表現できると考え、活用することにする。

実践3で、児童から「細かい説明を書いたり、式をたくさん書いたりする時にはノートがいいけれど、みんなの考えを知りたいから、タブレットで写真を撮って共有したい。」と声が上がったため、本時も同じように活用することにした。

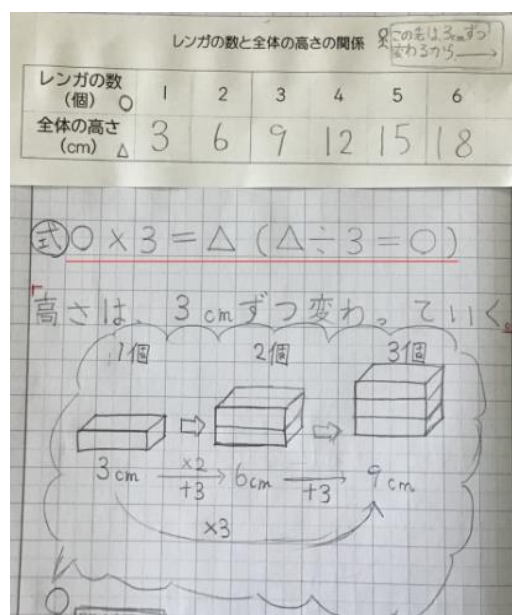


資料8 植木鉢が重なっていく様子の写真

(イ) 実践の成果

表を横で見て、全体の高さが3cmずつ高くなっていくことに全員が気がついたが、それによって「レンガも植木鉢も増え方が同じ。」と完結させてしまった児童が多かった。植木鉢の「+9」の部分に違和感をもった児童が少なかったのである。

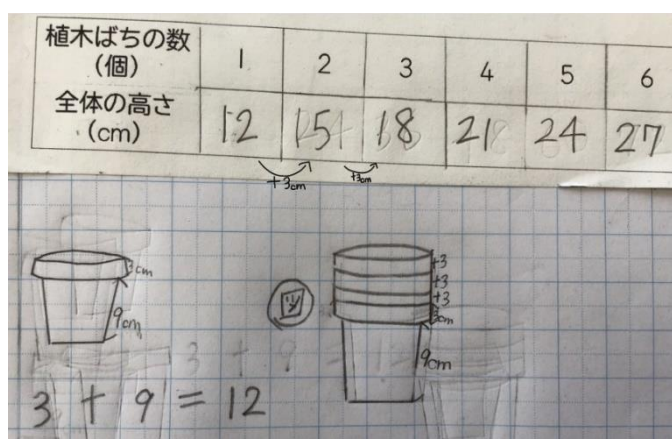
その原因として、右の写真の児童のように、表を縦で見ながら「レンガの数」と「全体の高さ」の関係を十分に考えなかったことが考えられる。「レンガの数が2倍、3倍になると、全体の高さも2倍、3倍になる」とことや、「全体の高さ＝3×レンガの数」ということ、植木鉢では同じようにならないことに気がついた児童は少なかった。



資料9 レンガの高さは数に比例するか

児童Kは、初め「植木鉢の全体の高さは12cmずつ増えていく」と書いていた。児童Kは、教科書にある茶色の植木鉢を実際に見たことがないと言い、植木鉢もレンガと同じように、その物の高さがそのまま増えていくと考えたようだ。

そこで、実物の植木鉢を重ねる動作をさせるとともに、重なっていく様子がわかる写真をタ

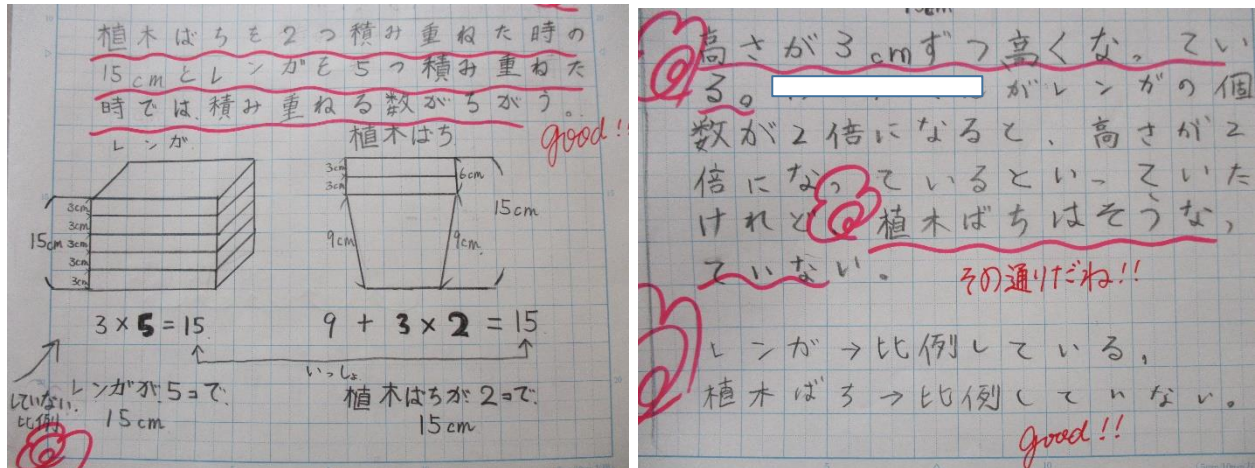


資料10 児童Kのノート

ブレットで配布した。「12cmのうち、9cmは中に入っちゃうんだ。」と言った時、児童Kは気がついた。「みんなが『レンガも植木鉢も増え方が一緒』って言っているのは、3cmずつ増えるのが同じってことなんだね。でも、重なり方が違うよ。植木鉢はほとんど中に入っちゃう。入らない3が増えていく。」とグループで話した。同じグループの児童が、「レンガはその物自体が重なっていくけど、植木鉢は12cmのうちの9cmは中に入っちゃう。だけど、1個目は入らないから、Kちゃんはノートに3+9=12って書いてたんだね。」と言うと、児童Kも納得していた。

児童Kの話を聞いた児童が、ふり返りでノートをまとめた際に下のように書いて

いたので、次時の導入で紹介した。すると、初めに「レンガも植木鉢も増え方が同じ。」と完結させていた児童も、「+3になっていくという点では同じだけど、2倍、3倍・・・という点では違う。植木鉢の高さはそうっていない。」「レンガは、高さ＝3×数だけど、植木鉢はノートにあるように3×数に+9をしないとイケない。」と理解することができた。



資料 11 児童Kの話を聞いた児童2名のふり返り

(ウ) 今後の課題

本時は、レンガも植木鉢も「全体の高さが3cmずつ増える」というように、増加量が共通しているという部分的な視野で問題を考えていた児童が多く、途中で思考が停滞してしまった。タブレットで、自分と友達の考えが似通っていると分かると、妙な安心感が子どもたちの中に生まれ、思考が止まってしまいかねない。タブレットで共有しただけでは、学びを深めるのに限界があることを痛感した。

本時であれば、思考を共有して間もなく、グループや一斉で話したり聴いたりする時間をもっと長く確保すべきだった。そうすることで、「レンガも植木鉢も、全体の高さが3cmずつ増える」という点でみんなと考えが同じだと思い込んでいた児童も、もっと広い視野で考えた児童によって、3cmずつ増えるという共通点はありながらも、「レンガはともなって2倍、3倍になっているが、植木鉢はそうでない。」ということに、もっと早く気がつくことができたと思う。

次時の導入で紹介した二人の児童の思考を、同じ授業の時間の中で話したり聴いたりして共有できれば、よりよかった。そのために、今後は「個人での思考」「タブレットでの共有」「話す・聴く共有」の時間のバランスを考えていきたい。子どもたちが真剣にタブレットを見ていると、学びが深まっているのではないかと勘違いし、長い時間を費やしてしまうこともある。子どもたちの話す言葉や、聴いている様子こそ教師が注目し、個に寄り添った支援していくためにも、グループや全体で話したり聴いたりする時間を十分に確保していきたい。

5 研究の成果と今後の課題

(1) 成果

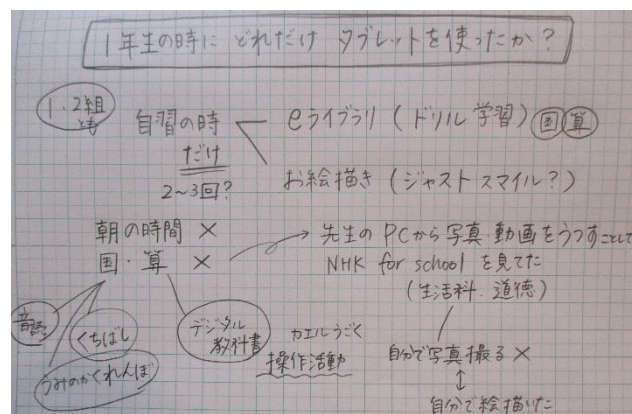
コロナによる3ヶ月の休校が明けた6月、2年生の子どもたちにどれだけタブレットを使ったことがあるかを聞くと、全員が「自習の時間にドリル学習やお絵かき機能を使ったことがあるだけ。」「算数や国語で使ったことはない。」と答えた。

そのため、一人一台導入されることを知った当初は、「2年生にタブレットの扱いは難しいのではないか。」「長い休校期間もあったし、ノートに書かせることの方が優先なのではないか。」と思っていたが、活用を進めていく中で、2年生でもある程度時間をかければタブレットを十分に扱えることや、ノートの良さ、タブレットの良さをそれぞれ生かしていけば、今まで通り書かせる活動も十分に行えることが分かった。

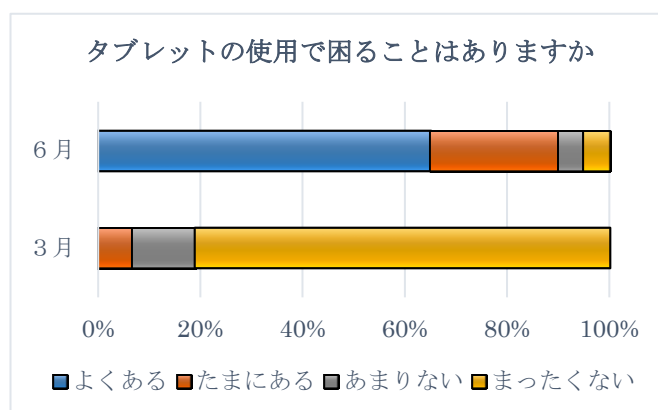
タブレットが導入され半年経った3月に行ったアンケートでは、「タブレットの操作で困ることはほとんどない。」という声が多かった。実際に授業でも、タブレットの操作が分からずに先へ進めない児童を見かけることはほとんどなく、困ったことがあれば友達に聞いてすぐに解決できることが多かった。

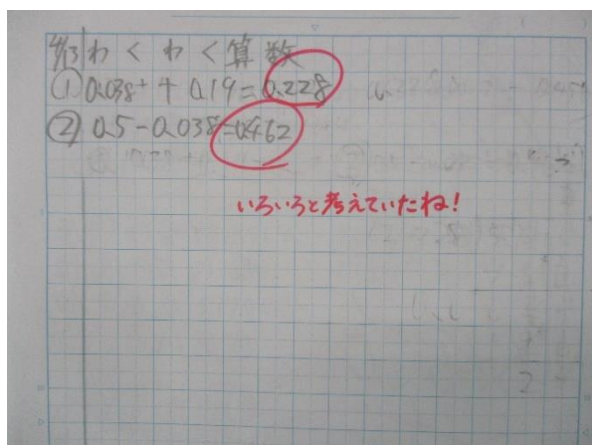
また、2年生でも5年生でも、「タブレットを使うと授業が分かりやすい。」「考えたことをすぐにみんなと共有できる。」「グループ以外の友達の考えも、たくさん知ることができるから楽しい。」「別の方法で解いてみようという気持ちになる。」という声が多かった。タブレット導入前と比べて、個人の思考から共有までを、短時間かつ同時にできることに魅力を感じているようだ。

他にも5年生では、「ノートに何を書いたらいいかわからないことが多かったが、みんなのノートを参考にしていたら書けるようになってきた。」という声も複数あった。4月当初、「式を書かなければいけない。」とこだわり何もかけずにいた児童Sが、6月の「小数のかけ算」「小数のわり算」の学習では、関係図を描いたり、簡単な数字を当てはめて考えたりしていたのが印象的だった。

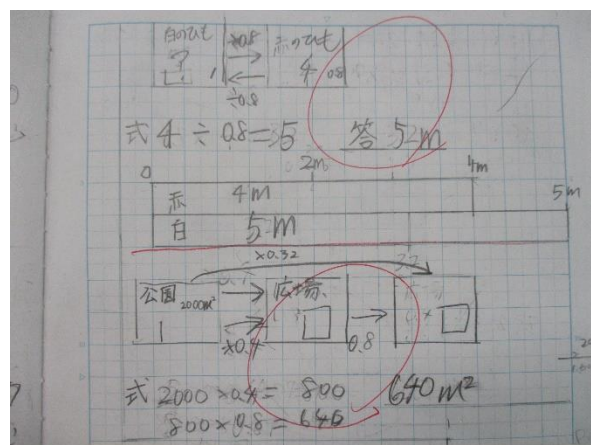


資料12 休校明けの6月に担任が聞き取ったメモ





資料 13 4月の児童Sのノート



資料 14 7月の児童Sのノート

魅力的な課題を提示することで児童の意欲喚起を行い、それぞれの思考をタブレットによって共有する。タブレットが「協働的な学び」への架け橋としての役割を担っている。「協働的な学び」は、一人一人の深い学びとして還元され、「もっと友達のことを聞いてみたい。」「もっと新しい考え方を知りたい。」と、主体的に学ぶことにつなげられる。

(2) 今後の課題

5年生の「小数のかけ算」の授業で、タブレット上で筆算をしていた児童がいた。手書きではなく、わざわざカードを複数段に分けて挿入し、数字と記号の場所を調整していた。これは、タブレットを活用しているとはまったく言えない。計算は速く正確にするべきだし、書いていた本人も、なんとなくこうしていたのだと言う。使い慣れている5年生でも、タブレットの使い方を間違えれば、遊び道具や暇つぶし道具になってしまう。教師が子どもたちの使い方に十分目を配り、その都度使い方が有効的かどうかを、一緒に考えていく必要がある。

また、量の概念や表し方を身につけるために操作活動は算数で欠かせない。今回の実践の中で言えば、お金の模型や1 c m³の模型を操作したこと、レンガや植木鉢を重ねてみたことがそれに当たる。タブレットはさまざまな使い方ができる便利なツールであるが、操作活動を省いてしまうことは危険である。

教師も子どもたちも、場当たりにタブレットを使用するのではなく、どんな場面でタブレットを使用することが有効的か、目的をもって活用できるように立ち止まって考える必要がある。今後も紙と鉛筆の良さと兼ね合わせながら、子どもたちの「協働的な学び」と主体的な学びのための一つのツールとして、タブレットを活用していきたい。

【参考文献】

- ・ 中央教育審議会答申（令和3年1月26日）
- ・ 小学校学習指導要領
- ・ 小学校学習指導要領解説